

## 「燃えつきた地図」における反復表現

はじめに

昭和四二年に書下ろし長編として発表された『燃えつきた地図』は、失敗作として扱われてきた。<sup>(1)</sup>このような評価がなされてきた背景には安部公房作品への研究が主に物語の主題と関連して、物語内容の意味を問うところで行われてきた<sup>(2)</sup>ことにその要因があると思われる。しかし、日野啓三も指摘する<sup>(3)</sup>ように、この作品ではその文体についての言及なしには、その評価というものは正當なものにならないように思われるのである。それゆえ、本稿では本作品を論じる際に欠かせないと思われるものの、具体的に言及されることのなかったこの作品の文体について考察し、それを通して本作品への再評価を試みたい。

文体を論じる際に、ここでは特に反復表現に注目することにする。というのは、この作品では反復表現が多用されており、また、その反復表現は、単に言葉が繰返されるに止まらず、かなり長い描写がそのまま他の場面で引用されたり、あるいは尻取りのような形で反復されたりする特徴を見せる。また、反復表現は現われる位置においても、長い描写の場合は冒頭と終結で、また、尻取りの場合は、テキスト上で形式的に空白が与えられているところで現われるなど、特徴がある

からである。

なお、小説は「反復の発見と反復によって生成された意味を明らかにすることを通してある程度は解釈されている。」<sup>(4)</sup>と言うが、多様な特徴を持って現われる本作品での反復表現にもそれは当てはまると思う。

### 一 作品の概要

本作品は、いなくなつた夫を探すように女から依頼を受けた私立探偵「ぼく」により語られる物語である。ぼく、女、女の弟、そして失踪人の会社の部下である田代の、四人の人物を中心に物語は展開される。そして、主要登場人物と言えるこの四人の人物は、形は違うものの、全員失踪のような状態になっていく。女は生きてはいるが、その存在を証明してくれるものは役所の証明書だけの存在であり、弟ははっきりした理由もなく殺害されてしまう。また、田代も自殺を予告する電話を「ぼく」に掛けたまま、理由も明かさず自殺してしまう。そして、物語の最後では、語り手である探偵自身も記憶喪失という状態になってしまうのである。このように、『燃えつきた地図』は様々な

徐 洪

形の失踪で満たされている。

## 二 「輪」の反復表現とその表現効果

本作品では、かなり長い描写が、他の場面で再び引用されており、そのような反復は特に物語の冒頭と終結部で行われる。本稿ではそのような反復を「輪」の反復表現と呼ぶことにする。

つまり、冒頭部で行われた描写が、他の場面であるにも関わらず、終結部で再び用いられるのである。ここでは、初めてその描写が行われるところを「輪」を始める部分とし、それが反復されて現われるところを「輪」を閉じる部分とする。

### (例文1)

#### (1) 「輪」を始める部分

道の表面は、アスファルトではなく、目の荒いコンクリートで固められ、スリップ防止の目的だろう、十センチほどの間隔で細いみぞが刻んである。しかし、歩行者のためには、さほど役に立ってくれそうにない。せつかくざらつかせたコンクリートの面も、ほこりや、タイヤの削り屑などで、すっかり目をつぶされてしまい、雨の日にゴム底の古靴だったりしたら、さぞかし歩きにくいことだろう。これは多分、自動車のためになら、あんがい役に立つかもしれない。融けなかった、雪やみぞれが、道路の水はけを悪くしているようなとき、水分を側溝に誘導してやるのなら、なんとか効果も期待できそうである。

もつとも、そうした配慮のわりには、車の数はすくなかった。歩道

がなかったせいもあるが、買物籠をさげた四、五人の女たちが、道幅いっぱいひろがって、話題の奪い合いに余念がない。(軽くホーンを叩いて、女たちの間を通り抜ける。同時に思わず、急ブレーキを踏んでいた。) ローラースケートを尻にしいた少年が、警笛の口まねをしながら、とつぜんカーブの向こうから現れ、すべり降りて(来たのである)。(p. 116)

#### (2) 「輪」を閉じる部分

道の表面は、アスファルトではなく、目の荒いコンクリートで固められ、スリップ防止の目的だろう、十センチほどの間隔で細いみぞが刻んである。しかし、歩行者のためには、さほど役に立ってくれそうにない。せつかくざらつかせたコンクリートの面も、ほこりや、タイヤの削り屑などで、すっかり目をつぶされてしまい、雨の日にゴム底の古靴だったりしたら、さぞかし歩きにくいことだろう。これは多分、自動車のためになら、あんがい役に立つかもしれない。なかば融けなかった、雪やみぞれが、道路の水はけを悪くしているようなとき、水分を側溝に誘導してやるのなら、なんとか効果も期待できそうである。

もつとも、そうした配慮のわりには、車の数はすくなかった。歩道がなかったせいもあるが、買物籠をさげた四、五人の女たちが、道幅いっぱいひろがって、話題の奪い合いに余念がない。ローラースケートを尻にしいた少年が、警笛の口まねをしながら、カーブの向こうから現れ、すべり降りて(行った)。(p. 294)

以上引用した例文の中のカッコの部分は、冒頭部と終結部が対応しない部分である。しかし、そのような部分が多少あるにせよ、「輪」の反復表現はその現われる位置が冒頭と終結とに統一されるなど、意図をもった描写と思われるので反復とみなすことができると思う。また、物語が始まってしばらくしたところでも同様の「輪」が見られる。

(例文2)

(1) 「輪」を始める部分

夕食の買出しに出かけた女たちは、むろんのこと、赤い乳母車も、自転車の少年たちも、闇の一刷毛で払い去られ、まっすぐ家路についた通勤者たちも、すでにめいめいの整理棚のなかに落ち着いて、しかし、途中で道草をくっている連中が戻ってくるには、まだ早すぎる、見捨てられた中途半端な時間の谷間……ぼくは立ち止まる……ちやうど「彼」の足取りが消えたという、そのあたりで。(p. 125)

(2) 「輪」を閉じる部分

夕食の買出しに出かけた女たちは、むろんのこと、赤い乳母車も、自転車の少年たちも、闇の一刷毛で払い去られ、まっすぐ家路についた通勤者たちも、すでにめいめいの整理棚のなかに落ち着いて、しかし、途中で道草をくっている連中が戻ってくるには、まだ早すぎる、見捨てられた中途半端な時間の谷間……ぼくは立ち止まる……ちやうど「彼」の足取りが消えたという、そのあたりで。(p. 286)

(例文3)

(1) 「輪」を始める部分

ゆっくり歩き、立ち止まり、踵を立ち止まり、踵を返しては、また歩く……ときおりバスの到着、まばらな足音、しかし決して見えない人影……見えないのは、なにも、人影ばかりではなく、断層も、地割れも、魔法の円も、秘密の地下道の入り口も、それらしいものの痕跡一つ認められないのだ……あるのはただ、待ちくたびれた、黒いうつろな遠近法……(p. 132)

(2) 「輪」を閉じる部分

ときおり、バスの到着、まばらな靴音、しかし決して見えない人影……あるのはただ、待ちくたびれた、黒いうつろな遠近法……しかし、ぼくは待ちくたびける……ゆっくり歩き、立ち止まり、踵を返しては、また歩く……(p. 288)

上記の二つの例文でも、(例文3)では、倒置がみられるが、ほぼ同じ描写である。ここでまず、「輪」の構造が行われた場面を検討してみる。(例文1)の(「輪」を始める部分)は、物語が始まる部分であって、探偵が女の家を訪ねていく場面である。(例文1)の(「輪」を閉じる部分)は、物語が終わる部分であって、記憶を失った探偵が自分の家を探して歩く場面である。また、(例文2)の(「輪」を始める部分)は、探偵が、失踪人が最後に目撃されたという場所について想像する場面であり、(「輪」を閉じる部分)は、自殺した田代のことを依頼人である女に報告するためにたずねた、女の家の前での場面である。そして、(例文3)の(「輪」を始める部分)は、依頼人である

女と女の弟との関係を疑った探偵が女の家の前で張り込みをする場面であり、「(輪)」を閉じる部分)は、依頼人の弟の殺害と田代の自殺などの、続いて起こる事件に戸惑いを感じる探偵が、それゆえ女の家に入ることを躊躇している場面である。

このように、本作品では、各々違う場面でありながら、冒頭部と終結部で同じ描写を用いる「(輪)」の反復表現が現われる。

それでは、このような「(輪)」の反復表現は本作品の中でどのような表現効果をもたらすのであろうか。

これと関連して、本作品の反復表現の構造に注目したウィリアム・カリの論がある。カリは『疎外の構造』の中で、本作品の構造を「円環的パターン」と名づけ、その構造は疎外された人間のはてしなない苦境を見出す構造であると分析し、終わりのない疎外という問題の体現を強調するための構造であると述べている。「円環的パターン」によって、終わりのない疎外という問題を実現しているという指摘は妥当であると思う。それを踏まえた上で、本稿では、反復表現がもたらす表現効果として、時間の線条性が意味をなさない世界の創造という効果をさらに提示する。

本作品は、探偵が依頼人に調査の報告をするという、報告書の形式を取っている。この形式から言う、「(輪)」の反復表現が現われる(例文1)から(例文3)は、いずれも報告書の外にある部分である。つまり、(例文1)の「(輪)」を始める部分)は、物語が始まる場面であって、探偵がまだ依頼人に会う前であり、「(輪)」を閉じる部分)は探偵と依頼人との間の契約期間が切れた後の場面での描写である。

また、(例文2)と(例文3)の「(輪)」を始める部分)は最初の報

告書を作成する前の、「ぼく」が依頼人と初めて出会う場面の途中での描写に当たる。そして、(例文2)と(例文3)の「(輪)」を閉じる部分)は、最後の報告書の作成が終わった後の描写である。探偵による最初の報告書は、二月十二日午前九時四十分書かれており、最後の報告書を書いた時間は、二月十四日午前六時半となっている。そこから判断すると、(例文2)と(例文3)の各々の「(輪)」を始める部分)と「(輪)」を閉じる部分)の間には少なくとも九二日の時間が経っていることになる。そして、(例文1)の「(輪)」を始める部分)と「(輪)」を閉じる部分)の間には、契約期間である一週間が経過したと言える。

ところが、本作品ではこのように時間が経過したにもかかわらず、同じ描写を繰り返して用いている。時間の経過と場面の転換に伴ってその状況に置かれている人物の気持ちも、また、行為も変わるのが自然ではなからうか。しかし、ここでは過ぎてしまった時間は無視され、物語の語り手である探偵は、時間の経過とは関係なしに、同じように感じたり、行動したりしているのである。また、周りの情景も同じで、一週間前「話題の奪い合いに余念」がなかった「女たち」は、一週間後にも同じように「話題の奪い合いに余念」がなく、一週間前に「ローラースケートを尻にしいて」現われた少年は、一週間後にも「ローラースケートを尻にしいて」現われているのである。

流れてしまったはずの時間は、同じ描写を用いることにより、再び最初の(1)の時間に戻されている。つまり、原点に戻されていると考えられる。ここで時間の線条性もう意味を持たなくなるのである。

三 「尻取り式」反復表現とその表現効果

本作品では前文の言葉を受けて、次の文を続けるという形の反復表現が行われるが、このような反復表現を本稿では「尻取り式」反復表現と呼ぶことにする。この「尻取り式」反復表現は次の二つの形式により現われる。

一つ目は、連想により現われる「尻取り式」反復表現である。(例文4)は本作品のpp. 177～194での内容であるが、この個所では文と文の間に空白が作られ、そこで場面転換が行われている。今、仮に各場面の文に番号を付ければ、(1)と(2)、(2)と(3)、(3)と(4)の間で場面転換が行われていることになる。そして、(2)と(3)、(3)と(4)の2回の場面転換は、「尻取り式」反復表現によって行われていると言える。

(例文4)

(1) 「ともかく、君だけが、頼りなのさ……費用のことは、責任をもちます……いよいよとなれば、ベトナム行きの船にだつて乗ってやるさ……三十人もかり集めて、乗組めば、一航海で、ざっと二十万にはなるっていうからな……ところで、君、もう少し付き合ってもいいんだろう？」

(2) 「酔っていらっしやるのね。」と、声はおだやかなくせに、ドアの鎖は掛たままだ。

(中略)ビールが、これほど佳しげな、すすり泣くような音をたてる

ものとは知らなかった……

(3) 「ビールの一本くらい、かまわないだろう。」べつにそんな誘いに乗ったわけではない。ほくが、あの河原のマイクロバスに立ち寄る気になったのは、むしろ空腹感のせいだった。(中略)ヒーターを入れて、窓を開放し、はじめてほつと、眉間の酔いの重さを感じていた。

(4) だが、彼女の表情には、まだ酔いの気配も窺われない。台所との仕切りのカーテンを肩でさばき、腕にかけた男物のレインコートの上に、たたんだ古新聞を載せ、さらにその上に、空いている方の掌をふせて、爪先に重心をかけた気取った少女のよな軽い足取り

(1) は失踪人の手掛かりを求めてM燃料店を訪ねた探偵が、そこで女の弟に出会い、その二度目の出会いにより、弟がゆすりを図っていることを知るようになる場面である。(1)の場面はゆすりの理由を知りたがる探偵を弟が誘うところで(2)の場面へと場面転換が起きる。そして、(2)の場面は、M燃料店訪問の結果を報告するために訪ねた、女の家での場面である。そして、(3)は(1)の弟との出会いの場面の続きであり、(4)は(2)に続く女の家での場面である。

ところで、ここでは(1)と(3)の弟との場面の間に女の家での場面の(2)が飛び込み、また、(2)と(4)の女の家での場面の間に(1)の続きである(3)の弟との出来事の場面が飛び込む。

(1)と(3)は探偵と女の弟との出会いの場面であり、(2)と(4)は女の家での探偵と女とのやりとりの場面であって、(1)と(3)また、(2)と(4)が生起順に従う時間の流れであるといえるが、その各々の流れの中に入り込む(2)と(3)により、ここでは時間の線条的な流れは断ち切られると云える。

ところで、ここでは傍線部の表現に注目したい。(2)と(3)では、場面も、時間も全然無関係であるにも関わらず、(2)の「ビールが、これほど侘しげな、すすり泣くような音を立てるものとは知らなかった」の「ビール」をそのまま受けて(3)の「ビールの一本くらい、かまわないだろう」というふうな次に次の場面に繋がっている。つまり、ここでは(2)の「ビール」からの連想により時間は過去に戻り、(1)の続きである(3)に繋がるのである。また、(3)と(4)の間でも、時間と場所の変化にも関わらず、「酔い」という言葉をそのまま受けて(4)で繋がっている。ここでもやはり(3)での「酔い」という言葉からの連想により(2)の続きである(4)が現われていると云える。

連想とは規則正しい連続的な時間の順序で現われるものではない。本作品では、連想により場面を繋げるという「尻取り式」反復表現を用いることにより、(1)と(3)の間に(2)が飛び込むようになり、また、(2)と(4)の間に(3)が飛び込むという入れ子の形になり、過去と現在とが交差する形で存在するようになり、ここで継起性と因果関係は廃棄される。つまり、連想による「尻取り式の反復表現」により、時間の線条性が断ち切られていると云えよう。

二つ目の「尻取り式」反復表現の形は、物理的空白を間において行

われる反復表現である。

(例文5)

(1) 「大した自信だ。それじゃ一体、なんのためにぼくを雇ったんですか？」

「私が、もう、待ちきれなくなったからだわ。」

(1行の空白あり)

(2) なるほど待つのはつらいことだ。それでもぼくは待ち続ける。

(p. 132)

(例文6)

(1) 空もさきほどから、強い風にひきちぎられて、雲の裂け目から久しぶりの薄日がさし……こうして、あらためて、さかさになった彼の写真を見直してみると……

(1行の空白あり)

(2) 頭のほうを手前に、さかさになった彼の写真……再び例の駐車場の管理人小屋の、窓口の台の上…… (p. 211)

(例文7)

(1) 取り残された女子学生は、呆然と、冷凍室の魚みたいにただ表情もなく立ちつくしている……

(4行の空白あり)

(2) ぼくは立ちつくす。コーヒー店《つばき》のカウンターわきの電話の前で時を失ったみたいに、ただ立ちつくす。(p. 204)

(例文5)では、(1)は探偵の「なぜ自分を雇ったか」という質問に、女がもう「待つ」ことができなくなったからだと答える場面である。(2)は女の家の前で張り込みをする探偵の独白である。時間の経過と場面の転換にも関わらず、女が使った「待つ」という言葉をそのまま探偵が繰り返す方式により文を繋げている。

(例文6)の(1)は探偵が自分の部屋で、写真を通してその人物を把握するという彼独自の方法で失踪人の写真を眺めている場面である。(2)はその写真を持って、「つばき」というコーヒーショップの駐車場で管理人に聞き込み調査をする場面である。ここでも時間の経過と場面の転換があるが、「彼の写真」という言葉を反復する方式で場面を繋げている。

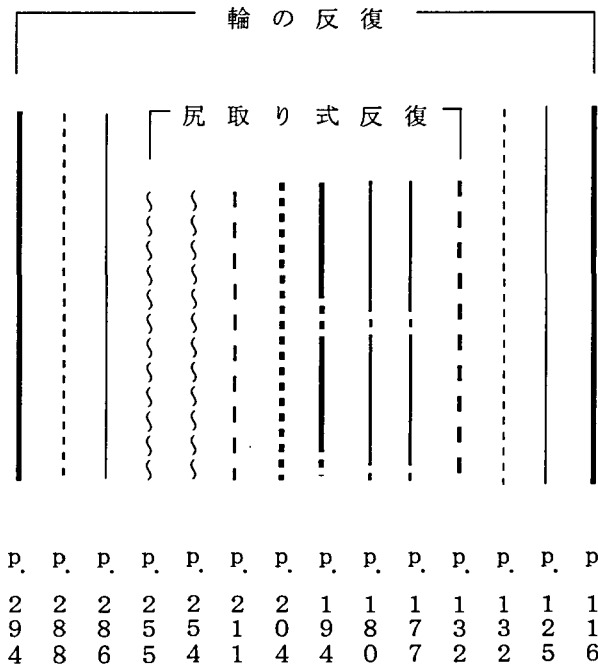
また、(例文7)の(1)は図書館で会った女子学生についての描写であり、その場面の後に四行の空白が置かれて、(2)の場面が続く。(2)は女の弟が死んだという話を聞いた探偵についての描写である。ここでも(1)と(2)の間には、「立ちつくす」という同じ言葉を反復して用いる「尻取り式」反復表現が用いられている。

以上の三つの例文では、共通的に(1)と(2)の間には物理的に空白が与えられており、それにより時間の経過、つまり、(1)と(2)の時間の断絶を読取ることができる。しかし、三つの例文ともその時間の経過とは関係なく(1)での言葉を、そのまま(2)に繋げている。これにより、(1)と(2)の間に存在していた時間の経過は感じられなくなる。つまり、両場面の間の時間は、一挙に折りたたまれて存在しなくなり、過去と現在が、あるいは、現在と過去とが重なってしまい、ここでも時間の線条性は断絶される。

おわりに

本作品での反復表現は、「輪」の反復表現と「尻取り式」反復表現として現われている。「輪」の反復表現は、作品の冒頭部と終結部で行われており、「尻取り式」反復表現は、テキストの表面上に空白が設けられている箇所で見られるという特徴を見せている。以上の反復表現の現われる位置を図表化すると次のようになる。

(図表)反復表現の現われ方



前頁の図表においては、同じ線種が同じ表現であることを示し、また、ページ番号はその反復表現が行われているページを示す。なお、p. 132、p. 194、p. 204、p. 211のように、線種が一つしか記されていないのは、同じページで反復表現が行われていることを意味する。

以上の図から窺えるように、「輪」の反復表現は、物語の冒頭と終結で現われることにより、冒頭と終結がつながり、始めは終わりとなり、また終わりは初めとなつて、時間は循環するものとして提示されることにより、線条的な時間の流れは廃棄される。

また、「尻取り式」反復表現は、物理的に与えられたテキスト上の空白を同じ言葉で繋げることにより、両出来事の間には存在していた時間の断絶は埋められてしまうのである。

われわれが時間の存在を感じることができるのは、出来事との差によつてではなからうか。ところで、本作品では異なつた出来事を反復表現を用いて描写することにより、両出来事は同じもののように把握されてしまい、出来事との差は廃棄され、線条的で均質的な時間の概念は廃棄されると言える。

もし、同じ描写が現われる個所をそれぞれ重ねあわせると、どうなるのだろうか。それはまるで襞のようになるだろう。つまり、反復個所が重なることで、本作品の中には数多い襞ができるようになり、反復表現の間のすべての物語は襞の中に姿を消すようになるだろう。しかし、その襞を開くと、再びその中から物語が現われるだろう。

本作品を一つの生地であるというなら、この生地は平らな生地ではなく、反復

表現により、多くの襞を持つ生地に作り上げられていると言えるだろう。反復表現により物語はいくら長い時間でも縮めたり、また、元に戻したりすることができるのではなからうか。これにより、本作品では、生起順の時間はもう意味を持たなくなるのである。

『燃えつきた地図』は、線条的な時間というものは意味をなさない世界として現われ、その中で、過去が現在の原因でも、また現在が過去の結果でもなくなるのであろう。結局、反復表現によりもたらされた線条的な時間の概念の廃棄により、因果律は破られるのである。そして、因果律を廃棄する反復表現の表現効果により、原因はなく結果だけが存在する「失踪」という本作品の内容はより浮き彫りになるのである。

反復表現の考察を通して、本作品は、「反復表現」という形式と、「失踪」という物語の内容とが有機的に関わり合いながら、『燃えつきた地図』という作品を作り上げていることが確認できた。これにより、本作品は「安易な生地」としてではなく、「失踪」という物語の内容の内部的な発展がその独特な文体によつて形作られた「独自の生地」として現われていると思つのである。

注(1)これに関連して、秋山駿の『安易な小説の生地をあらわにする場合が多いため』

「ほとんど空虚で、無内容だといつてもよい、理解できぬわけのわからぬもの」という評価(「想像はひび割れる」—安部公房『燃えつきた地図』、『文学界』昭和四二年一月、p. 185)と、森川達也の『燃えつきた地図』は、初期の優れた文学作品に比して、かなり後退した場所で作られている」という評価などがある。(安部公房における前衛性、『国文学』昭和四四年九月、p. 19)

(2)平岡篤頼は、安部公房の作品が『S・カルマ氏の犯罪』の名刺は何を象徴しているか、『砂の女』の砂は、『他人の仮面』の仮面は、何



を（あらわして）いるかが真つ先に問われる」と指摘するが、このような現状は『燃えつきた地図』の場合にも当てはまると思う。「安部公房における小説の方法と文体」『作家の世界 安部公房』番町書房昭和五三年

(3) 日野啓三は、『燃えつきた地図』を「文章の表現力そのものが作品の展開とリアリティーを支える」作品であると評している。（『安部公房の矛盾』『国文学』昭和四七年九月臨時増刊号、p.135）

(4) J・ヒリス・ミラー、『小説と反復 七つのイギリス小説』、上村盛人の他九人訳、英宝社、平成三年、p.3

(5) ウィリアム・カリ、『疎外の構図—安部公房・ベケット・カフカの小説』、安西鉄雄訳、新潮社、昭和四十年

テキストの引用は新潮社刊『安部公房全集』21巻（平成九年）による。又、傍線は筆者による。

（そ ほん、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期）